

## 第3章

### 参加者感想

## ■宿泊研修全般を通じて学んだこと、感じたこと

「実際に見たからこそ分かることがある。」この一言に尽きると思った。是非、より多くの人に被災地に行ってもらいたい。「現地に来てもらうのが一番の応援」という声も多く聞いた。今度は、ゆっくり訪れてみたい。	生徒
今まで、「東日本大震災」というワードであった2011年の災害は、私の中でただの歴史で語られる一部でしかないと考えていた。岩手県内を回ったことで、現実起こった事象であると理解できた。	生徒
事前学習で様々なデータや写真などを見て学んだ。当然そのような資料も、客観的に状況を判断するということや後世に伝えるという意味では非常に大きな役割をもつ。しかし、実際に被災地を訪れ、現状を見て、被災者の話を聞くということも、災害を理解する上で非常に重要なことであった。今後も、現場を直接見ることを大切にしたい。	生徒
街からがれきが撤去され、一見きれいになったようでも問題は山積みであった。しかし、マスメディアで報道される機会も少なくなり、国内でも被災していない地域の人の中ではもう過去の話と風化してきつつあるのかもしれない。震災はまだ終わっていないという言葉にはっとさせられた。	生徒
自分があの場にいたらどのような行動をとっていただろうかと想像しながら宿泊研修を体験した。自分の防災への意識の低かったことを感じた。次の3月11日は今までの3月11日とはまた違う思いで迎えることになるだろう。	生徒
実際に被害があった場所に行き、人に話を聞くことが、本当の防災を学ぶということなのかもしれない。宿泊研修後、宿泊研修の報告と災害の際に皆に行動してもらいたいことについて、自校の宿泊防災訓練の機会に1年生に対して講話を行った。今後も、このような伝える取組を続けたい。	生徒
岩手県内の複数の場所を視察したことで、場所によって復興の速さの違いを感じた。率先避難者という言葉が印象に残っている。自分から避難を呼び掛けることを行いたい。また、地域の子供たちに学んだことを伝えていきたい。	生徒
現地の高校生は、年齢は変わらないが、自分たちに比べて防災についてたくさんの知識をもっていた。様々な方が、言葉を詰まらせながらも話してくれたことを、私たちは決して忘れてはならない。	生徒
宿泊研修で、語り部の話を聞き、震災遺構を見学するなど様々な貴重な体験をした。だから、私たちは東日本大震災を風化させないように行動していかなければならない。	生徒
実際に被災地に行ってみ聞しなければ分からないことがたくさんあった。合同防災キャンプは、そのような体験ができる貴重な行事であった。	生徒
合同防災キャンプで自分と同じ目標の人に出会うことができ、一緒に話し合い、自分の背中を押してくれた。いろいろな現地での出会いや出来事によって、自分の決意を固めることができた大切な4日間であった。	生徒
震災経験者の話を聞かなければ、被災のことも津波の恐怖も理解することができなかった。また、他校の人たちと話すことが滅多にないので、合同防災キャンプの場で、防災を始めとしていろいろ話すことができ参加してよかった。	生徒
自分が参加した目的の一つとして、東日本大震災による被害の程度と現在の復興状況を見て学ぶというものがあった。その点で非常に充実した宿泊研修であった。性別も年代も立場も違う様々な人から話を聞くことができた経験は生涯私の宝になるだろう。	生徒
被害が甚大であった場所には人が戻ってきていない。それが復興が遅れている理由にもつながっていると感じた。	生徒
宿泊研修で、常日頃当たり前に見えているものや考え方が、危機的状況においては役に立たないことを学んだ。危険が迫りくる状況では、その時の判断が生死を分ける。今まではこれで大丈夫であったからこれからもそれでよいということが成立しないことを体感した。「自分の命は自分で守る。」しかも、それを他人の命も同じように守るためにどうしなければいけないかという難しい課題をもらった。自分自身を大切にできない者が他人を大切にできるはずもなく、生徒に自分自身をどのように大切にしていこうかを伝え、指導していこうと考える。	教員
地震だけでなく様々な災害が全国で発生しているが、そのような被災地を思うことの必要性を伝えていかなければならないと感じた。	教員

現地の方は、様々なつらい体験をしてきたりしているが、東京から来た私たちにいろいろなことを教えていただき、温かく迎えてくださった。人の温かさを知って学んだ。	生徒
行政がどうにかしてくれると思うのではなく、そこに住む人たちがその地域をどうしたいのかを考え訴えることで、復興の明確な道筋を立てることができ、復興のスピードを上げることになると思う。自分が居住している地域の特性に応じて、防災を兼ねるまちづくりをしていくことが必要であろう。	生徒
天災（自然災害）はいつ起こっても不思議ではないという言葉聞いたとき、私たち人間は自然ともっと共存していくことが大切だと思った。	生徒
宿泊研修で、一人ではなく皆で行動することの重要性を学んだ。複数人で様々な課題を解決していくことによって、防災リーダーとして皆から頼られる存在になると思った。まずは、学んだことを家族や友人に伝えていくことから始めたい。	生徒
災害が発生した時に冷静でいることが重要だと感じた。冷静に周りを見渡し、その場所が安全かどうか判断して、正しい行動をとらなければならない。	生徒
菜の花畑のボランティアが終わった後の紙芝居で、私たち高校生でもできることがたくさんあると知り、もし自分が大地震などで被災したら、自分の力でできる限り積極的に地域の人の力になろうと思う。	生徒
被災地を見て、自然を前にして人間がいかに無力であるか改めて感じた。しかし、人間は無力でも対策することはできる。次の世代に何を残し、何を伝えるか考えていく必要がある。	生徒
天災はいつ起こっても不思議ではないので、いつ、いかなる状況で起こっても対応できるよう、日頃から訓練することが大切だと学ぶことができた。日頃からの訓練を大切にしていきたい。	生徒
これまでの避難訓練で行っていた事前に想定されていた事と、現実に起こった事の大きなギャップを感じた。	生徒
宿泊研修を通して、防災への意識が変わった。自然災害に対してどう対策していけばよいか、どう備えていけばよいか見えてきた気がする。4日間いろいろなものを見て体験し、自分は何ができるのか改めて考え直す時間であったと思う。	生徒
災害は忘れた頃にやってくるのではなく、災害は忘れたからやってくると話してくれた方がいた。自然現象の大きさは同じでもそれに対する人的被害の大きさを変えることはできる。これからは被災地の今を見た地域の防災リーダーとして、宿泊研修で学んだことを伝え、自分の周りの人の防災意識を高めたいと思う。	生徒
被災地で話をしてくれた多くの方が、とにかく自分が生きることが最優先とおっしゃっていた。たくさんのアドバイスを真摯に受け止め、実際に災害が発生した時には、誰よりも安全な行動をとれる人になりたい。	生徒
現地では多くの方から家族についての話を聞いた。改めて、家族の大切さを思い知った。	生徒
一番大切なことは、自分の命を大切にすることであると感じた。今、生きているこの時を感謝して生きていく。	生徒
被災地で見たもの、出会った人全てが教材であった。プログラムにあるものだけでなく、バスの車窓から見た景色からも勉強になることがあった。災害の多い日本だからこそ、防災に関する教育は欠かせないものだと感じた。これをきっかけに、今後も防災について学び、それを生徒に還元していきたい。	教員
かけがえのない今ある命、これから誕生してくる命を守るためにも、この地震、津波で失われた命から私たちは学び続けなければならないと感じた。日頃から、自分の命は自分で守る意識を生徒に説き、そのためにどう対応するのかを教え伝えることが大切であると感じた。今後実践していきたい。	教員
今までの地震でも自分は大丈夫と心のどこかで思っていた。自分が逃げないことで他人の命を奪うことになるという言葉に、自身の考えの甘さを思い知らされたような気がした。津波でんでんことという古からの教えの意味に納得ができた宿泊研修であった。	教員

<p>宿泊研修で何度も聞いた「津波てんでんこ」、「命てんでんこ」という言葉は、津波だけではなく災害全てに当てはまると思う。自分の身の周りの人にも教えて、いざという時により多くの人が助かるようにしたいと思った。</p>	生徒
<p>生きる覚悟は希望につながる。生きる覚悟とは、「学び、備え、体験」だと思う。合同防災キャンプでこの三つを学ぶことができた。災害が発生した時にすぐに行動できるよう、着替えを近くに置いたり靴をそろえたりするなど身近でできることからやっていきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修で「生きること」を学んだ。生きていればなんとでもなるという言葉はとても身に染みだ。今後は、災害に関して自分で更に勉強し、アイデアを出して人の役に立てるようにしていきたい。</p>	生徒
<p>自分の命は自分で守ること、過信しないこと、想定外なことが起こること、被災した時に復興に向けてどうすべきか考えることなどを学んだ。復興するためには、その地域の人たちだけでなく、企業や国、ボランティアの方々の力が必要になることが分かった。</p>	生徒
<p>最大のボランティアは、次の災害で我々が死なないことではないだろうか。学校や仕事先など、自宅以外の場所で災害に遭遇した際の避難先を確認しておきたい。</p>	生徒
<p>被災された方々が共通して発信していたことは、まず自分が助かることである。一見、自己犠牲が美しいようだが、それはごく一部である。自らが助かることで、助けられる命も多くある。従って、被災すれば心配事はいろいろあると考えられるが、まず身の安全を確保したい。</p>	生徒
<p>これから東日本大震災を知らない子や、東日本大震災の怖さを忘れてしまう人がたくさん出てきてしまう。なので、学んできた私たちが次の世代へと語り継がなければならない。</p>	生徒
<p>被災地で話を聞いて、建築物の取り壊すか保存するかの問題など、解決には程遠い課題もあることを理解した。学んだことを周囲に伝えていき、周りの人に少しでも防災に興味をもってもらいたい。</p>	生徒
<p>地震の発生に備えるために、防災グッズの購入、家具の固定等を家族と協力して行おうと思う。また、宿泊研修に行ったことで、地域防災に興味をもった。少し調べてみようと思う。</p>	生徒
<p>現地の方の話を聞いて、常日頃から対策をしておくことが大切であることを学んだ。</p>	生徒
<p>津波の高さは予測でしかないことを理解し、早めにより安全な避難をすることが大切であると学んだ。</p>	生徒
<p>昔から津波てんでんこという言葉が残るほど津波が多く防災の意識が高い場所でも、自分だけは大丈夫と思って避難せずに津波に流された方が大勢いたことが分かった。災害を甘く見てはならないこと、避難が大切であることを理解した。</p>	生徒
<p>警報や注意報の段階から避難する準備を開始したり、子供や高齢者と避難することでもっと被害を抑えられることを知った。地域や小学校で行われる防災訓練に参加し、自分にできることを増やしていこうと思う。</p>	生徒
<p>協力し合うこと、自分の身は自分で守ること、地震が発生したらすぐに避難することを宿泊研修を通じて学んだ。</p>	生徒
<p>これから、災害時に自分の身を守るためにも、他人の助けになれるためにも、防災士としての知識を身に付けていこうと思う。</p>	生徒
<p>自分の命は自分で守るのが原則だが、目の前の人を見捨てて助かることに対する自責の念も被災者には渦巻いていた。だが、自分が逃げないことが他人の命を奪ってしまうことにつながるかもしれないという意識は忘れてはならない。災害時の大げさな避難行動は笑われるだけで済むが、逃げないことの最悪は死であるという言葉が、学校で避難訓練を行う一教員として強く印象に残った。百聞は一見にしかずの研修であった。</p>	教員
<p>映像を見るだけでは感じられなかったものが、現地に立ち、生徒と一緒に避難経路をたどったことで、当時の緊迫した状況を感じ取ることができた。災害時に年下の子供たちの手を引いて避難することができる正義感をもち自発的に行動できるような生徒へと育成したいと感じた。</p>	教員

## ■ 宿泊研修全般を通じて学んだことから、今後取り組んでいきたいこと

<p>同じ年齢の高校生から聞いた話は、どの語り部の方よりも心に届いた。機会があれば、別の被災地でもボランティアに参加してみたい。宿泊研修後には体験や教訓を家族と話し合い、携帯電話に区の防災マップを入れたり、水も多く備蓄するようにした。</p>	生徒
<p>宿泊研修を通じて、自分が居住している地域で開催されている防災関係のイベントに参加してみたいと思うようになった。その中で、支援される側ではなく、支援する側に回って活動していきたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修後、学校で防災について話す機会を得て、発表を行った。友人から良かったと言ってもらい、達成感があった。しかし、これだけで話を聞いてくれたみんなが防災を考えてくれるかと言われると、自信はない。防災は絶えず続けなければ意味がないと考えている。容易なことではないが、合同防災キャンプの経験を大事にして、今後も防災を続けたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修での体験を友達にも伝え学んでもらうとともに、自分は毎日少しだけでも思い出して、今回の体験を忘れないようにしたい。</p>	生徒
<p>実際にどれ程の被害が発生したかを見ることができたので、それを忘れずに周りの人に説明をする。これから発生し得る災害に備えることを、家族だけでなく地域一帯へ呼び掛けたり、地域の団結力を高めて災害に強くなりたい。</p>	生徒
<p>7年も前の出来事であるからと理由付けて風化させてはならないと思った。まず家族や友達に合同防災キャンプでの経験、学んだことを伝え、自分の防災、周囲の防災につなげたいと思う。また、家族と一緒に岩手県に遊びに行きたい。</p>	生徒
<p>津波の怖さだけを伝えるのではなく、逃げることへの大切さ、知識を周りの大人、友人、家族にそしているいろいろな方に知ってもらいたいため、自ら広めていきたい。</p>	生徒
<p>自宅では災害に対しての備えを全くやっていたいなかった。しかし、宿泊研修の経験を経て、非常時の食料などを準備するようになった。家族にも地震の恐ろしさや備え方を教えていきたい。</p>	生徒
<p>現地で聞いてきた話を宿泊研修に参加した全員で伝えていけたらと思う。今後、地震に備え、居住地域のハザードマップや過去の災害について調べてみたい。</p>	生徒
<p>学校での避難訓練や、実際に災害が起こった時には、宿泊研修で学んだことを思い出して実行したい。</p>	生徒
<p>首都直下地震に備えるために、聞いてきた話を役に立てていきたい。</p>	生徒
<p>家族と避難場所を決め、非常食やライトを準備したい。靴はいつもそろえる、寝るときは明日着る服を枕元に置くことを心掛けたい。</p>	生徒
<p>いつ、どこにいる時に首都直下地震が発生するかは分からないので、対策をしておくことが重要だと感じた。</p>	生徒
<p>準備しておくことが大事だと思う。避難場所や非常食などの確認を行いたい。高校生なので、災害時には焦らずに冷静に判断して行動したい。</p>	生徒
<p>語り部の方が「今度はあなたたちに語り部になってもらいたい。」とおっしゃっていたことが印象に残った。一人の語り部として、宿泊研修で感じたことや学んだことを伝えていく。また、登下校や休憩時間に予告無しで避難訓練を実施するなど、様々な状況を想定して勤務校の避難訓練を実施していきたい。</p>	教員
<p>被災地の視察をして、改めて被害の大きさを感じた。その事実を10年後、100年後と語り継いでいかなければならない。サイレンが鳴らない避難訓練を実施し、一人一人が率先避難者となり、自ら適切な行動がとれるような訓練を実施していきたい。</p>	教員
<p>教員は生徒の安心・安全を守ることを第一として生徒指導を行っているが、その原点の重要性を宿泊研修の実体験を通じて再認識した。宿泊研修終了後、ホームルームや授業において現地で撮影した画像を生徒に示しながら、災害から自分と家族を守ることに語り掛けた。語り部ほどの説得力や迫真性はなかったが、生徒の防災意識を高めるためにできるだけ早く経験を伝えた。</p>	教員

<p>災害への備えとして、自宅の建築年数と耐震性を調べ、棚やテレビなどの家具の転倒防止を確認する。また、自宅最寄の避難所の場所とそこまでの経路を確認し、自らが率先避難者となり積極的な行動をとっていきたい。災害時には、高校生として英語等を使い、旅行などで来日している外国人に支援したい。</p>	生徒
<p>合同防災キャンプで防災について学び、自宅では備えが全然できていないことが分かった。家がどのくらい前に建てられたのか、備蓄品がどのくらい用意されているのかを把握し、どのようなルートで避難するのか、どこで家族と集まるかについて話し合っておきたい。</p>	生徒
<p>合同防災キャンプに参加していなかったら、日常の中で防災を考えることはなかったと思う。日頃から、ハザードマップの確認や避難時に備えて荷物をまとめるなど、生活に防災を意識付けていかなければならないと感じた。自分の部屋の家具、棚の配置や玄関の靴の向きなど気付いたことから改善していきたい。</p>	生徒
<p>もし、地震が発生したのが電車の中だったら、学校だったら、夜中だったらということを常にイメージしておくことの大切さや、自分の命は自分で守るということの重要性を、地域の方や家族、学校に伝えられるようにしたい。</p>	生徒
<p>自分の学科は建築科なので、地震や津波に対する設計にも取り組みたいと考えた。また、自分の祖母から居住地域のハザードマップを買ったので、マップを見て友人たちと一緒にできることを考えていきたい。</p>	生徒
<p>災害の恐ろしさを忘れないようにしたい。また、津波や火災等の災害に巻き込まれないためにはどうしたらよいか考えていきたい。まずは、自分が住んでいる町をよく知ることから始めたい。</p>	生徒
<p>合同防災キャンプに参加して、自分の防災意識はまだ甘いと思った。家具の固定、備蓄品、避難経路の確認など簡単なことから始めていきたい。また、地域の人とコミュニケーションをとることの重要性にも気付いた。</p>	生徒
<p>自分が住んでいる地域では、地震や火災による被害が心配である。火災の時は、初期消火や避難の助けを進んで行い、被害を少なくすることに努めたい。</p>	生徒
<p>自分が居住している地域は、地震の時に揺れやすく、水害の発生リスクも高い地域である。学校では、防災教育に力を入れてもらいたいと思うし、自分自身も学んだことを周りに教えていきたい。</p>	生徒
<p>事前準備の大切さを痛感した。防災に関して何も知らないということが、どれ程恐ろしいか知ることができた。今後、備蓄についてしっかりチェックしたい。</p>	生徒
<p>防潮堤は津波を防ぐことに加え、避難する時間を稼ぐ施設であることを初めて知った。そのような学んできたことを皆に教えて、私たちの防災意識を高めたい。</p>	生徒
<p>ここまで避難すれば大丈夫だろう、津波は来ないといった過信が、災害時に自分の身を滅ぼすと感じた。このことを踏まえ、自ら行動することを第一としたい。</p>	生徒
<p>今後、体の不自由な人の避難を考えていかなければならない。避難の話聞いて、体の不自由な人が逃げることは非常に困難であることを実感した。今後、自身で調べ考察していきたい。</p>	生徒
<p>先生や学校、地域との関わりの中で、警報や拡声に頼らない避難訓練を行うように自ら呼び掛けていきたい。また、防災についての臨機応変の対応をしっかり学んでいきたい。</p>	生徒
<p>助け合いの重要性を深く感じる事ができた。震災発生から7年以上が経ち、復旧活動は地域の人だけでなく、県外のボランティアの方々の支えがあるからこそできたことだと聞き、助け合いの尊さに気付くことができた。自分自身も助け合いを率先して行いたい。</p>	生徒
<p>宿泊研修に行く前は「被災地のために」という気分であったが、宿泊研修を経て「他人事ではない」と意識が変わった。勤務校における防災施設の把握、緊急時の対応のチェックなど取り組むべきことは無限に思いつくが、大切なことは、この体験を忘れず、常に高い防災意識をもち続けることである。</p>	教員
<p>勤務校で起こり得る災害への対応について、役割分担や備えができていないか改めて確認していく。私たち教員は、生徒を預かっている責任を再認識して行動しなければならない。</p>	教員

震災が発生し、周りの人が動かない状態でも、周りの目を気にするのではなく自分から動き出していきたい。さらに、動かない周りの人にも影響を与えていけるように、自分から動いていきたい。	生徒
自分が災害に遭遇したら、合同防災キャンプで学んだことを教訓にして、自ら皆のために動きたいと思う。	生徒
高校生は体力的にも一番動ける年代だと思う。なので、災害時には高齢者、けが人、子供を積極的に助けることができる人になるよう宿泊研修で学んだことを生かしていきたい。	生徒
地域の交流や助け合いが、災害時に生存する近道だと感じた。災害が発生した時に落ち着いて行動することは困難だと思うが、自分と周りの人の命を守るためにできる限り落ち着いて行動したい。	生徒
まずは人とのつながりを構築していきたい。平常時からつながりを作っていかなければ、非常時に指示を出したり、お願いをしても効果がない。さらに、近隣住民の安否すら把握できないであろう。	生徒
合同防災キャンプに参加したことで、もっとボランティア活動に取り組んでみようと思った。また、防災士を増やすためにも、友達や知人に紹介していきたい。	生徒
災害は人の予想をはるかに超えてやってくる危険性をもっていることを学んだ。将来は、消防士として、防災士としていろいろな学校で生徒たちに学んだことを伝え、大災害が起こっても死者が出ないような未来になるように取り組んでいきたい。	生徒
私たちが正しい防災知識をもち、日頃から意識することで、自然災害をただの自然現象に抑えることができることを学んだ。より多くの人に防災意識を高めてもらうために、防災士として積極的に行動していきたい。	生徒
防災士として、悪い集団心理の発生を防ぐだけでなく、適切な避難行動を皆でとるような良い集団心理を作れるようにしていきたいと思った。そのために、普段から少しずつでも地域の方々との交流を深めたりなどして、お互いを知ろうと思う。	生徒
復興作業の進んでいない場所や人手が足りていなくて困っている地域にボランティアとして助けになりたいと思う。大人になったら、ボランティア団体を結成し、災害があった地域のボランティアに行ったり、地域の人とのつながりを作るようなことをやってみたい。	生徒
今回行った岩手県だけではなく、他県の被災状況はどうだったか調べ、そちらにも実際に行ってみたい。今後、大きな災害が発生した時は、被災地に行ってボランティア活動を行いたい。自分が大人になった時、もう一度岩手県に行って、今とどれくらい変化したかを見たいと思う。	生徒
岩手県で見聞したことを家族や友人に伝え、さらには、地域のボランティア活動に参加していきたいと思う。将来、岩手県に行く機会があれば、ボランティアとしても旅行としても行きたい。	生徒
ボランティアを今後も積極的に取り組んでいきたい。ボランティアを通じて、誰かの役に立つことのやりがいを感じた。災害ボランティアだけに絞らず、もっと自分の身近な所でもボランティアに取り組んでいきたい。	生徒
校務において避難訓練を実施しており、現在は、地震や火災が発生した旨の放送を入れて避難する設定で訓練を行っている。この点において工夫をしていきたい。教職員一人一人が災害に対して迅速かつ効率的な行動ができるような避難訓練を実施し、教職員の防災への意識を高めていきたい。	教員
合同防災キャンプで得た知識や経験を教材にして、避難訓練や道徳、学級活動、ロングホームルームを活用して全校生徒に伝えていきたい。また、自校の参加した生徒を中心として、学年内での知識の伝達・活用をすることで、防災において大切なことを考えさせる機会をもちたい。さらに、次年度の宿泊防災訓練では、防災士として、後輩のアドバイザーとして活躍できるよう働き掛けを行いたい。	教員
避難を促すこと、ハザードマップを確認すること、地域の防災訓練への参画の3点に取り組んでいきたい。このくらい大丈夫、何で本気になっているの、と思っているのは避難が間に合わないことがある。結果として大事に至らないことが多いかもしれないが、徹底的に避難を促すことをやっていきたい。	教員

合同防災キャンプ2018を実施するに際して、次の各団体及び講師の方々、さらに岩手県の方々に御協力いただきました。御礼申し上げます。

〈協力団体〉

一般社団法人宮古観光文化交流協会	岩手県教育委員会
岩手県立釜石商工高等学校	岩手県立宮古工業高等学校
釜石大槌地区行政事務組合大槌消防署	公益財団法人東京防災救急協会
三陸鉄道株式会社	三陸花ホテルはまぎく
新生おおつち	特定非営利活動法人吉里吉里国
菜の花プロジェクト	陸前高田市観光物産協会

〈防災士養成講座講師〉

安倍 祥 (東北大学災害科学国際研究所学術研究員)  
碓川 豊 (前大槌町長)  
大木 聖子 (慶應義塾大学環境情報学部准教授)  
神谷 未生 川端 喜久子 赤崎 幾也 (一般社団法人おらが大槌夢広場)  
甘中 繁雄 (特定非営利活動法人日本防災士機構理事)  
曾根 太一 (株式会社防災士研修センター)  
森本 晋也 (岩手大学大学院教育学研究科准教授)  
渡辺 賢也 (社会福祉法人大槌町社会福祉協議会)

## 編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

〈本書作成担当〉

東京都教育庁指導部指導企画課長	石田 周
東京都教育庁指導部主任指導主事	藤江 敏郎
東京都教育庁指導部指導企画課統括指導主事	大村 賢治
東京都教育庁指導部指導企画課課長代理	小林 純也
東京都教育庁指導部指導企画課指導主事	菅野 恭子

合同防災キャンプ2018報告書

東京都教育委員会印刷物登録 平成30年度第178号 平成31年2月

所在地 〒163-8001  
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
東京都庁第一本庁舎北側 38階  
電話 03-5320-6836  
編集協力・印刷 名鉄観光サービス株式会社